

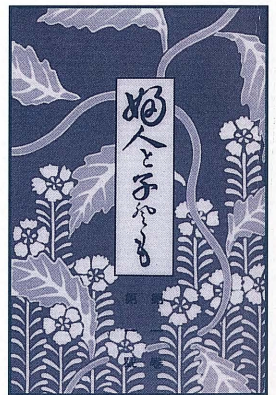
創刊100周年

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

6



第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

第100巻 第6号 日本幼稚園協会

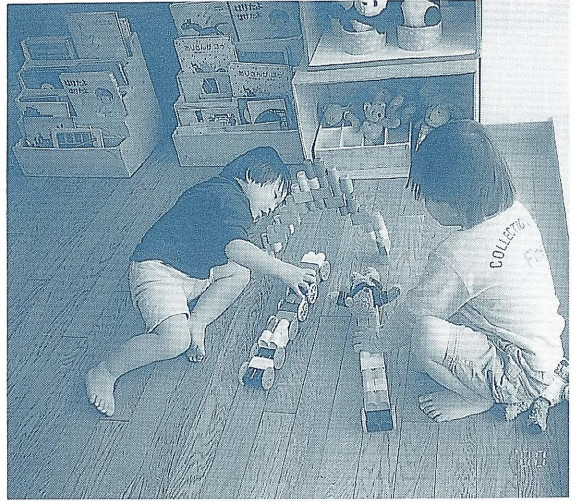
21世紀、止めどなく広がる保育機能の多様化の時代に贈る。

親による子ども虐待の横行する時代に、親が子育ての責任を果たすためには、保育者はどんなサポートができるか、共に考え提案しています。

少子化が進みます進む時代に
子どもと接する経験が不足のまま、保育の仕事に就こうとする保育者が多い今、子どもに何をみて、どうかかれはよいかを、分かりやすく説いています。

子どもを取り巻く環境の変化が著しい時代に
幼稚園、保育園のいずれも、今までは異なる保育の課題が求められています。21世紀の保育の在り方と課題について、具体的に提案しています。

最新の資料と研究成果に基づいて
子どもの幸せを願い、子どもと共に歩む大人すべてに、保育の喜びと生きがいを感じられる保育の原理を示しています。



遊びに興ずる子どもたち（ききょう保育園） 本書より

現代保育学入門

子どもの発達と保育の原理を理解するために



最新刊

諏訪きぬ編・著
A5判・288頁
定価：本体2,000円＋税

●諏訪きぬ プロフィール

名古屋大学大学院教育学研究科修士課程修了。同大学教育学部助手、鳥取大学教授などを経て、現在明星大学教授。
著書「保育が変わるとき」（編著・ひとなる書房）
「かわりのなかで育ちあう」（編著・フレーベル館）
「子どもを活かす園内研修」（共編著・フレーベル館）他
保育理論・児童文化論を講義するかたわら、保育者研修、地域での子育てサポートに関わるなど、幅広く活躍中。



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所または
本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キダーブックの **フレーベル館**

幼児の教育

第100巻 第6号

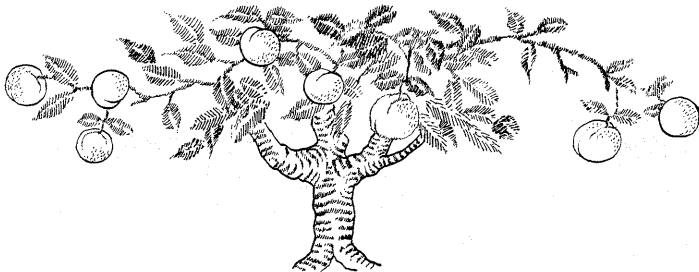


幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇〇巻 第六号 —

© 2001
日本幼稚園協会

心理学徒としての倉橋惣三……………	サトウタツヤ……………	(4)
いま、子どもたちは じっくり見つけてつきあう時間、 ゆっくり育って伸びる実感……………	尾形 節子……………	(12)
幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤― (八)『幼稚園記』―幼稚園との出会い……………	国吉 栄……………	(20)
ある日……………		(30)



私が幼児教育を志した頃(18)……………津守 真…(32)

『幼児の教育』と私 私の『幼児の教育』時代……………佐藤 和代…(42)

短い冬の季節でもらったもの

霜柱に出会った子どもたちの記録から……………阿部 康子…(47)

耳をすまして 目をこらして(14)……………宮里 暁美…(56)

タンカー船とハワイ行き列車……………清宮 聡子…(58)

表紙絵／片柳 淳子

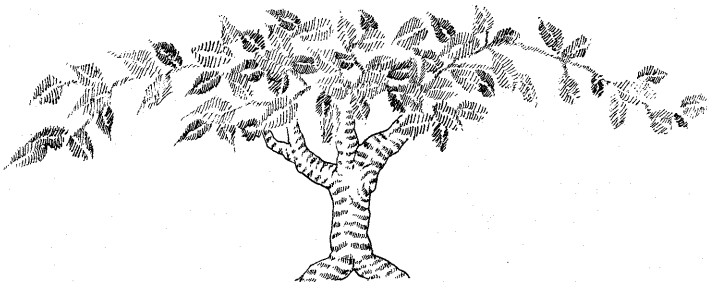
扉題字／津守 真

扉カット／第二十三卷第八号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「みのり」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子



心理学徒としての倉橋惣三

サトウタツヤ

はじめに

倉橋惣三（以下、惣三と称する）と言えば、幼児教育・保育の大家である。そうに決まっている。

実際、一九一七（大正六）年十一月、東京女子高等師範学校教授・附属幼稚園主事となつてからの活躍はめざましく、とても一言で言い表せない。保育について、実践に裏打ちされた理論をうち立てた、あるいは

理論にもとづく実践をうち立てた、偉大な人物である。

そして、惣三について論じた論文も数多く出版されている。坂元（一九七六）による『倉橋惣三・その人と思想』、森上（一九九三）による『子どもに生きて知る』といった著書が出版されて惣三について知ることができる。

だが、これらの著作では惣三が「心理学徒」であったことにはそれほど注意が払われていない。惣三の前

史として扱われているにすぎない面がある。そこで、本稿では、彼が心理学徒だった時のことを中心にして、惣三の像に迫ってみたいと思う。

まず、惣三が心理学徒だったということはどのようなことか？

それは、惣三が東京帝国大学文科大学（現・東大文学部）哲学科の心理学専修の卒業生だったということである。一九〇六（明治三十九）年のことである。

それがどうしたの？ と聞きたい人もいるだろうが、この年は心理学専修が出来て二年目であった。つまり、惣三は大学で心理学なるものを専門に学んだ人たちの極めて最初の人々のひとりだった。

今でこそ心理学ブームだの何だの言われているが、明治維新後の政府にとって心理学などは泡沫学問の一つであった。心理学のための「お雇い外国人」もいなかったし、心理学のために留学生を派遣することも一八九七（明治三十）年まで無かったのである。

そうした中で一九〇五（明治三十八）年に心理学は、哲学科から独立することができたのである。学生から見ると、哲学の学生として雑多な科目を学ぶ中で、自分なりに「心理学」や「倫理学」などを修めていた状態から、自分は心理学をやっている！ というように専攻を明確にするような制度改革がなされたのである。

保育学専攻を卒業して社会に出る人間全てが、保育学に自分のアイデンティティを持っているわけではない。法学部を卒業して社会に出る人間全てが、法学に自分のアイデンティティを持っているわけではない。そう考えると、心理学専修が出来たからといって大した出来事ではない感じもする。しかし、惣三の場合は名目上の心理学専修ではなかった。むしろ、心理学とじっくりと向き合っていたのである。

高校卒業までの倉橋惣三

倉橋惣三は一八八二（明治十五）年十二月二十八

日、静岡市に生まれた。倉橋家は代々徳川家の幕臣（旗本）であり、父政直は徳川宗家を継いだ田安亀之助（徳川家達）に従って静岡に移り住んだのであった。

惣三少年は、父が岡山市の裁判所勤務になったことに伴って岡山で小学校に入学した。しかし、教育熱心な両親は彼を東京の小学校で学ばせることにした（父が岡山に残った）。その後、東京府尋常中学校を経て、第一高等学校に入学した。十八歳の時であった。当時の高校は現在の高校とは少し異なり、「高校最学年十大学一・二年」くらいの教養教育を旨とした学校であった。当時の高等学校卒業生は、希望に応じて全国どこかの帝国大学への入学を約束されていたから、あの意味ではエリートであった。

高校に入った惣三は、他の学生たちとは少し変わっていた。彼は、東京女高師附属幼稚園に行くのを楽しみにしていたのである。そもそも彼は、中学生の時から『児童研究』という雑誌を読んでいたという

くらいであり、単なる子ども好きの域を越えた「子ども好きな少年」であったようだ（『児童研究』のことは後述）。また、この時期に、キリスト教に関心を持ち、特に元一高教師だった内村鑑三の影響を強く受ける。さらに『ペスタロッツチ伝』に出会い、ペスタロッツチに心酔するようになる。

森上（一九九三）は惣三の伝記において、彼の高校時代のプロフィールを以下のようにまとめている。

1 子どもたちに「おにいちゃん」と慕われながらお茶の水幼稚園で遊ぶ青年

2 『児童研究』を講読し、将来牧場の中に幼稚園をつくることを夢見る青年

3 内村鑑三の聖書研究会の会員としてキリスト教の精神を学ぶ青年

4 ペスタロッツチにあこがれ、子どもと共に生き学べる心の持ち主になりたいと望む青年

そして惣三青年は、高校を卒業すると東京帝大に入

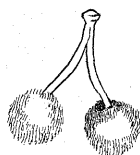
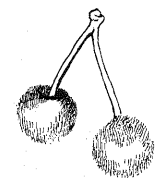
学し、哲学科で学ぶのである。

東京帝大における倉橋惣三

東大の哲学科では元良もとら勇次郎に指導を受けた。元良は日本の心理学の父と称される人物で、日本の心理学は彼から始まったと言つても過言ではない。元良はジョンズ・ホプキンス大学に留学し博士号を取得して帰国後、帝国大学（現東京大学）にて心理学担当の教授となったものである。ジョンズ・ホプキンス大学では発達心理学者として名高いホールのもとで心理学を学んでいたこともあって、元良は発達心理学にも造詣が深く、日本児童研究会の会長も務めていた。惣三が中学校時代から読みふけていた『児童研究』を發行

していた会である。また、元良もキリスト者であり、そうした面の影響も惣三に対してあつたかもしれない。

さて、先に、倉橋惣三は心理学専修生としては早い部類に入ると書いた。細かいことを除くと、一九〇五（明治三十八）年の卒業生から、卒論の受験学科、というものが定められ、学生はいくつかの専修を選ぶことができるようになったのである。卒論の受験学科というのは分かりにくい制度だが、要は卒業論文の提出先である。それまでは「哲学科の卒論」という大きな枠だったのが、「心理学専修の卒論」ということになったのである。そして、この制度ができて二年目の学生として倉橋惣三は東京帝大を卒業したのであつた。つ



まり、心理学専修二期生である。この時期、東大以外には心理学専修はなかつたから、惣三は本当の意味での心理学専修二期生であつた。同級

生には野上俊夫（後に京大教授）や大槻快尊（後に東大助手を経て実生院住職）がおり、一つ上の学年には桑田芳蔵（後の東大教授）、一つ下の学年には菅原教造（後の東京女高師教授）、二つ下の学年には上野陽一（戦後に産能大学を創立）などがいた。

惣三が提出した卒論は「児童の言語及び絵画」という題名であることは記録から分かるが、残念ながら現物は残っていない。内容は不明である。指導教官の元良は学生たちについてあまり細かいことは言わない人だったようで、子ども好きの惣三が幼稚園で研究をしていることについても肯定的に受け入れていたのだと思われる。

大学卒業後の倉橋惣三

大学を卒業した惣三は大学院に入学した。しかし、一年志願兵として陸軍に入隊する。心理学専修の二期生だった惣三は、心理学を活かして就職することはな

かった。世の中に、心理学というものがよく伝わっていない時期であるから、心理学に期待する人も多くなかったのである。

そこで、心理学専修を卒業したての人々は考えた。心理学の価値を世の中に伝えなくては!!

こうして心理学通俗講話会なる会が産声をあげるようになったのである。ここで通俗とは、中学校・高等学校三年以上の生徒、幼稚園・小学校の教職員、家庭の主婦などを対象にして講演するということを示している。

幹事としてこの会を立ち上げたのが、一九〇六（明治三十九）年卒の大槻快尊と倉橋惣三、翌年卒の菅原教造、翌々年卒の上野陽一であった。指導教官の元良には顧問への就任を快諾してもらい、第一回目の会を催したところ、本人たちもびっくりするような大盛況となった。第一回のプログラムは次のようであった。また、その後に惣三が講演した時のプログラムも一緒

に示しておく。

倉橋惣三 小言の研究

第一回 一九〇九(明治四十二)年五月

第二十回 一九一二(明治四十五)年一月

菅原教造 着物の色合の話

倉橋惣三 子供の隠歴性に就て

大槻快尊 返事の速い人遅い人

菅原教造 日本画に現れたる松と鶴

倉橋惣三 子供の嘘言

関根正直 縁起の話

第八回 一九一〇(明治四十三)年二月

倉橋惣三 子供の臆病

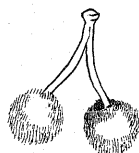
いわゆる心理学とは異なる話題も含まれているが、こうした内容の講演会の中心として倉橋惣三は活躍していたし、それは世間にも認められていた。六〇〇人が来場したこともあったという。

富士川游 人相と骨相

第十二回 一九一〇(明治四十三)年十月

菅原教造 運動の美

では、惣三が行った講演の内容はどのようなものだったのだろうか。講演の内容は『心理学通俗講話』



という雑誌に掲載されている。講演が好評だったため、講演を聞けなかった人のために講演内容を出版することになったのである。

第一回「子供の嘘言」において惣三は、子どもがウソをつかない無垢な存在だと信じるが故に子どもがウソをつくともやみに怒ってしまうことの無いように、と注意を促している。子どもと大人のウソではその意味が違うのであり、子どものウソについて研究することが重要なのだと惣三は主張する。そして、ウソを十三の類型に分けている。

遊戯におけるウソ　みえ坊のウソ

うそと知らずに言うウソ　いたづらのウソ

つい言ってしまうウソ　言い抜けのウソ

意地づくのウソ　自分のためにたくらむウソ

人を喜ばすためのウソ　癖のウソ

味方には真実、敵には計略のウソ　やまいのウソ

俠気のウソ

こうしたウソについて惣三は細かく説明している

(ここでは割愛)。そして、ウソの性質が分かっつまえば、それぞれの教育法・矯正法は自然に分かってくるとした上で、惣三はさらに注意を促す。

子どものウソには大人が教えるものが多い、というのである。

「ウソも方便主義の濫用」「ウソの教唆」「大人の猜疑的態度」こうしたことが子どもたちにウソを教えると惣三は警告する。

最初のもものは、大人が子どもと目先の約束をして(後でお菓子買ってあげるからおとなしくしなさい)においてそれを破ること、次のものは、子どもが何か悪いこと(皿を割るとか)したときに、周りにいる大人が「自然に落っこちたことにおこう」などということ、についてそれぞれの非を説くものであり、最後のもものは、一度子どもがウソをつく、「またウソ言ってるだろう」のような態度で接することがかえって子どもをウソに追い込むということについて注意を

促しているのである。

さらにこの講演の最後で惣三はこう言つて嘆く。

「大人のくせにウソをついて、殆どウソでまらめて、ウソで固めぬいた近頃の社会で、一人の子どもをウソつきで無い者に育てようとするのは中々容易ではありません」

いつの時代も似たようなものなのだなあと思うのは私だけではないだろう。

おわりに

惣三が行つた講演の内容は、他にも活字になつていゝる。それらを読むと、自分が親として子どもとかかわっている時の反省なども盛り込まれている。惣三は常に、子どもの立場にたつて、子どもの視線でものごとを捉えていたと思われるのである。心理学通俗講話会を立ち上げて活躍した彼であるが、一九一七（大正六）年に東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大

学）教授となると、やはり心理学とは距離を置くようになっていく。しかし、子どもへの興味を大学でも成就しえたのは心理学という学問であつたし、心理学を伝えようとした心理学通俗講話会では彼は常に子どもの発達の話をしていたのである。色々な意味で、心理学は惣三にとってその後の活躍のためのエネルギーを蓄えるものだつたと言えるのではないだろうか。

（立命館大学）

参考文献

『心理学通俗講話』 第一輯 第三輯 第五輯

『通史 日本の心理学』 北大路書房

いま、子どもたちは

じっくり見つめてつきあう時間、

ゆっくり育って伸びる実感

尾形 節子

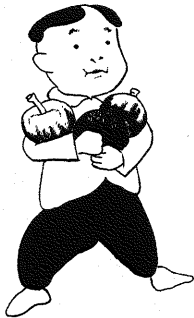
Pくんは小学校一年生。いつも午後一時三〇分過ぎに小学校から帰ってきます。児童館の玄関で靴を履き替えて、学童保育の部屋（児童館二階の一室）に「ただいま」と入っていきます。そして、ランドセルを部屋に置き、連絡帳を学童の先生に渡すと、あっという間に部屋を出て一階に降

りてきます。「おがさーん、なげっこしよう」「いよいよ」というのが私たちの挨拶代わり。他の子どもたちが集まってきて児童館がにぎやかになるまでのほんの一〇〜一五分間、二人でなげっこ勝負（思い切りボールを投げて、相手が取れなかつたら一点ゲットできる。先に一〇点ゲットした方

が勝ち)を楽しみます。最近では、互角の勝負ができるようになってきたので、私もPくんもおたがいにいい遊び相手という仲になっています。八ヶ月の間に随分上手になったPくんなのです。上手になったおかげでまでまでドッジボール(キャンディボールという幼児用の柔らかいボールを使つてする内野のみの室内ドッジボール。子どもたちの間ではやっている)やミニサッカーなどのスポーツゲームにもなんとか仲間入りできるようになってきました。

八ヶ月前、はじめて会つた頃のPくんは、いつもイライラして周りの人にあたりちらしているという様子でした。私が児童館に勤め始めた五月というのも難しい時期だったのかもしれませんが。子どもたちは入学・進級直後で、しかも小学生は運動会前、中学生は中間テストというタイミング。新しく出会う場所・友達・先生、はじめての授

業・行事……、いろいろな要素が重なり合つて複雑で、生活のペースが落ち着かない五月。それぞれの子どもたちがそれぞれに不安定な時期だったのだと思います。とにかく、児童館で出会う子どもたちが、どの子どもどの子ども男女の別なく、ちよつと気に入らないと思うとキツイ悪態をついてくるのです。その言い方のキツイことといったら驚くばかりで、「こんなこと面と向かつて言われて、新卒の頃の私だったらかなりへこんで、下手したら立ち直れなかつたかも……」と思うようなことを平気で言つてきます。でも、そこでへこんでいたら子どもたちとの暮らしは生き抜いてい



けません。「まあ、私自身が試されているんだろ
う」とまずは様子見に徹しました。

しばらくすると、子どもたちには子どもたちの
ルールがあつて、その上で自分の居場所を必死で
確保している感じが感じとれるようになってきま
した。キツイ言葉は、攻撃するための剣というよ
りは、自分の身を守るための盾であるように思わ
れました。はつきりとは明示されないわりにはど
こか厳格な子どもたちのオリジナル・ルール、一
緒に暮らしていく上での暗黙の了解といったもの
がなんとなく私にも感じられるようになってきま
した。新年度の生活も軌道に乗り落ち着いてきた
夏休み前には、それぞれの子どもたちと私の関係
も「児童館にお互いがいて当たり前」と思えるく
らいになってきました。でも、そんな時期でもP
くんはやはりイライラしていて、むやみやたらに
いろんな子どもとぶつかっていたのです。

Pくんは、暗黙の了解というのが苦手なよう
でした。「これは絶対していい」「これは絶対しては
いけない」と明確に線引きできるルール（例外的
ないルール）は理解できても、「こういう時は良
くて、こういう時はだめ」というような臨機応変
なものは実感としてわからない。想像の範疇を越
えているのです。だからそういう状況になると、
訳が分からなくなるとんがってしまふのです。

たとえば、すごく仲良しの二人がおたがいにポー
ルをぶつけ合ってげらげら笑っているところを見
かけると、自分もそこへ行つて彼らにボールをぶ
つけ出します。「入れて」などの言葉もかけずに
やってしまうので、相手の二人は「何で急にじゃ
まするんだよ」と一致団結してPくんをボールを
ぶつけ出します。Pくんには、ボールをぶつけ
合つて笑つてる楽しさしか見えていない（この
二人はボールをぶつけてもいいんだ）と思つてい

る)ので、自分に急に向かってきた二人の敵意の意味が分かりません。わからないけれども、当座の敵意から身を守るため、泣きながらはむかつて行きます。やり返されて悔しくて、わめき散らします。周りの子どもたちは、「またPがやなことして、一人で怒って泣いてる」とうわさ話に花を咲かせます。

その展開があつという間で、しかもそれが落ちていた頃にはまた別のトラブルを引き起こしています。自分で自分のイメージをどんどん悪くしてしまっているのです。本当は他の子どもたちだって暗黙の了解などというものを全部をわかって生活しているわけではありません。「あ、違つたんだな」と思った瞬間に、謝つたりギャグをとばしたりしてその場の雰囲気や和ませて、その時その時を乗り切っているのですが、Pくんはその辺がひどく不器用なのです。自分のやりたいことをさ

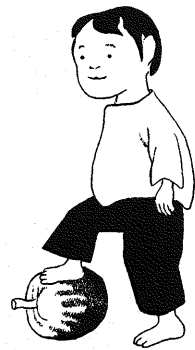
えぎられることはすべて自分に対する反感の表れ、自分という存在の否定と感じてしまっているような反応を示し、提案や助言に気付く心のゆとりがなくなってしまうのです。

七月半ば頃のことです。Pくんは、「まてまてドッジボールに入りたい」と思っているのですが、うまくできないうえにすぐに喧嘩になつてしまつたので、「Pはだめ」と最初から入れてもらえません。でも、Pくんと同じくらい下手な子どもでも、ボールに当たつた時のリアクションのおもしろい子どもや小柄で当てたらかわいそうと思わせるたたずまいの子どもなどは「入っていいよ」と快諾されているのです。要するに、がっちりとした見た目のわりには下手で、当てられるとすごい迫力で怒り出し、かと思うと泣き出して恨みごとを言うPくんは、他の子どもたちからすると一緒に遊ぶには荷が重いということなのです。

でも、小学校一年生のPくんにそこまで客観的に考えろというのは無理な話です。だからPくんは「自分だけ、入れてもらえない」「自分だけ、外される」と悔しい思いをかみしめながら、キャンディボールを抱えて強がっています。いつもキャンディボールを抱えて、怒った顔で児童館の中にいるのです。私は、「誰かと一緒に遊びたいからボールキープしているのよね。でも、今仲間に入ってもすぐいざこざになって、『やつぱりPってめんどくせー』というイメージばかり強くなってしまふから逆効果だし。要するに、もうすこしキャッチボールができるようになれば仲間に入れるのでは……」と思いました。そこで、「あ、ボール持つてるんだ。キャッチボールしようよ」と誘ってみました。「やつてもいいけど」というのがPくんの精一杯の強がったこたえでした。

あらためて二人きりでやつてみると、思ってい

た以上に、Pくんはキャッチボールが下手でした。まず、ボールを投げてもあまり前にいきません。肩がうまく入らないために、ボールに力が乗っていないのです。しかもなまじカッコつけて投げるものだから、かえって下手に見えてしまうのです。でもまあ、これは良くあることだし、慣れればすぐ上手になることだと思つたので気になりませんでした。大変だったのは、かなり緩くなくてもボールが取れないということでした。ボールを投げるといことは、極端にいえば自分との戦いのみですが、ボールを取るためには、相手がボールを投げる様子を見ていることや



相手と呼吸を合わせることなどがとても重要になってきます。Pくんは自分がボールを取るイメージでいっぱいなので、ボールを取るために必要な準備や情報集めをしていないのです。このことは、「自分の『やりたい』気持ちでいっぱい、かえってやりたいことができなくなっている」Pくんの生活全般とも重なってくるような気がしました。そこで、是非ともPくんとキャッチボールを続け、それを通してお互いの存在に気付くことができるようになりたいと思いました。

ところが、そんな私の思いとは裏腹に、Pくんはすぐにキャッチボールがいやになってしまいました。うまくいかないからおもしろくないのです。でも、Pくんの「人とかわって遊びたい」という気持ちはとても強いのです。だから、Pくんは私に「(自分に) ボールを当てて」と要求してきました。これは私にとっては、結構な試練でし

た。あてつこのように、「おたがいに当たりたくないと思っている」という前提でボールを当て合うゲームなら私も楽しむことはできます。でも、目の前にただまっすぐ立っている子どもにもボールを当てて「楽しい」とは私自身がどうしても思えなかつたのです。何回かPくんの望むようにボールを当てても、どうしても後味が悪くて、「なんかキャッチボールのほうがおもしろい」と提案してしまいます。でも、Pくんはうまくできないことなんかやりたくないのです。「ボールを当てて」と頼んできます。Pくんにとっては、一緒に遊んでいるこの時間がこの上なく楽しいらしく、ここにご笑みがこぼれて、嬉しそうな表情があふれてきます。今Pくんが必要としているは、「相手の状況に気付くこと(私が児童館の指導員として思うこと)」ではなく、「自分の気持ちに寄り添ってくれること」なのだということがピンピンと伝

わってきました。

それが伝わってきた以上、そこから始めるしかありません。しかたがないのでがんばって、「私がボールを当てる↓当たったらPくんが「ボンバー」と叫んで爆発する」という遊びに落ち着きました。でも、私自身がそれを楽しんでいると思ってやると、私自身に自分のテンションをかなりあげていく必要があると、二、三回当てると「どうにかしてこの流れを断ち切りたい」と思ってしまう。自分に向き合わなければなりません。私自身から楽しいと思ってしまうと、Pくんと一緒に楽しむ限り、Pくんの「自分に寄り添って欲しい」という思いは満たされず、「相手の状況に気付けて欲しい」という私の思いも届かないと確信しながらも、自分の気持ちをそこまでもっていかれない日々が続きました。

そんなある日、私がQくんと山崩し（将棋）を

しているところにPくんがやってきました。「おがさーん、あてっこしよう」というので、「今、山崩しの途中だから行けないよ。一緒にやる？」と反対に誘ってみました。Pくんと私との時間も随分重ね、「誰でもいいから相手をして欲しい」という存在から「おがさんと遊びたい」と思ってもらえる存在になってきた頃だったのだと思います。ちょっと前までだったら「この人がだめだったら別の人」と即座に動いていたのですが、この日は「じゃ、やる」と言ってくれて仲間に入ってきました。Pくんは山崩しをするのが初めてでしたが、ルールはすぐわかり、しかもとても上手でした。「うまいね」と周りからも認められ、とても嬉しそうに楽しそうでした。Pくんは普段うまいかない分、うまいと思ったときは本当に嬉しくて、笑いが自分の中からこぼれだしてくるのです。嬉しい時の笑顔が本当に無防備で、「いかにいつも

はりつめていたか」ということが実感されました。山崩しはPくんにとって子ども同士で安心して遊べるとても楽しい遊びとなったのです。楽しく遊ぶ中で、言葉のやりとりも弾み、相手の様子に目を向けるゆとりもできてきました。楽しそうに遊んでいる姿は周りの子どもたちにも見えています。むやみやたらにざわざの頻度も減っています。遊びの仲間に入れてもらえるチャンスもちよつとずつ増えてきました。

夏休みあけの九月。キャッチボールも随分できるようにになり、大人が審判に入ればまてまてドッジボールにも参加できるようになってきました。あいかわらず「自分がやりたい」思いは強いので、味方チームの子どもが取ろうとしているボールまでも体当たりで取りに行くところは文句の言われっぱなしです。でも、本人なりに「しまった、やっちゃった」とは思うようになってきました。

ミニサッカーがやりだした二月。まてまてドッジボールよりもルールが複雑でPくんには今ひとつよくわかりません。でも、ミスプレーをして仲間から文句を言われても、すぐには遊びから逃げないようになってきました。ちよつと動きを止めて、ゲームの成り行きを見てからまた動き出すようになったのです。ゆっくりゆっくりとPくんの力が蓄えられて伸びていつている気配が感じられました。

子どもたちとの四季。

緑しげる 夏、実りゆたかな 秋、

落葉たくわえ、木芽ふくらむ 冬、

花ひらく 春。

それぞれの喜びを味わいながら過ごしていきたいと思っています。

(西東京市在住)



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(八) 『幼稚園記』 —— 幼稚園との出会い

関信三の著作について

幼稚園に出会った関信三は、精力的に、あるいは生き急ぐように、次々と幼稚園書の翻訳・執筆に取り組んだ。明治九年七月、幼稚園に関する関信三のはじめの翻訳書『幼稚園記』全三巻が出版された。続いて

十年には『幼稚園記附録』、十一年には『幼稚園創立法』、十二年には『幼稚園法二十遊嬉』と、年ごとにその成果が発表されたが、最後の書が出版された年の十一月四日、関信三は三十七歳で病没した。

ふり返ってみれば、関信三の一連の著作は、日本の幼稚園がしだいに形を整えていった歩みと軌を一にし

ていた。というより、彼が発表した翻訳・著作は、常に幼稚園の歩みの一歩先にあつて、あたかも、暗中模索の幼稚園の事業に、手作りの羅針盤をこしらえているようなものであつた。

日本で最初に出版された幼稚園書としては桑田親五訳『幼稚園』おむこのそのが知られているが、九年一月に出版されたのは全三巻のうち上巻のみ。その後も翻訳は進捗せず、中巻の出版は十年十一月、下巻の刊行はさらに遅れて十一年六月のことであつたから、『幼稚園記』は實質的に最初期の唯一の幼稚園文献であつた。加えて、著者が九年十一月に開設された日本初の国立幼稚園の園長に任命されるに及んで、彼の一連の著作は幼稚園の第一人者の書として、今日考えられている以上に、その後の幼稚園の普及に大きな影響を及ぼすことになつたのである。

今日彼の書はほとんど忘れられているが、しかしそれらは、歴史を証言するものとして、再読される価値

がある。海外文献が直接日本の幼稚園のテキストになつたのではなく、関信三というひとりの人間によつて消化されたものがテキストとなつて、日本に幼稚園が広まつていった。日本の幼稚園は、彼が呻吟しつつ選んだ一つひとつの言葉によつて形造られていったと言つてもよい。その意味で、翻訳者関信三の生涯をこれまでたどつてきたことは意味があろうし、また逆に彼の著作を通して、晩年というにはあまりにも若く短かつた、彼の生涯最後の数年について考えることもできるのではないかと思う。彼の著作は、保育史研究にとつても、関信三研究にとつても、またとない資料である。

今回から四回にわたつて彼の著作を発表順に取りあげるつもりであるが、紙幅の都合でそれぞれのごく一部にふれることしかできない。彼の著作はすべて国立国会図書館に所蔵されているが、『明治保育文献集』（日本らいぶらり 昭和52）に復刻されており、便利

である。興味のある方は一読されたい。

『幼稚園記』の原典

『幼稚園記』の原典は、よく知られているように Adolf Douai の “The Kindergarten” (E. Steiger, 1871) である。著者のドゥアイは、ドイツからの政治亡命者のひとりで、ニュージャージー州ニューアークのジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーの校長を務めていた。一八六一年に同校に付設された幼稚園が、アメリカのジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーに併設された最初の幼稚園とされている。“The Kindergarten” は、十年にわたる幼稚園運営の経験をもつ著者が、師範学校の生徒に向けて行った講演をまとめたものである。

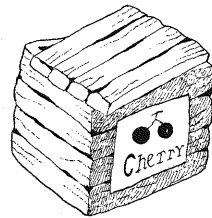
同書は、関信三がはじめて読んだ幼稚園についての書物であった。このことが関信三の幼稚園理解と日本の幼稚園の出発の姿に少なからぬ影響を及ぼしたと思

う。幼稚園とは一体何なのか。自分でもまだよく理解できないものに、彼は何か言葉をあてがひ、形を与えようとした。皮肉なことに、関信三がのちのちまで

師とあおいだドゥアイは、

ドゥアイ自身が述べているように、フレーベルの思想を伝えるのに熱心ではなかった。彼はむしろ当時ジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーの主流であったペスタロッチの事物教授法の立場から、フレーベルとは距離を隔して幼稚園を紹介しようとしていたのである。しかし、関信三はそのような原著者の姿勢を理解することはできなかった。今日の私たちと違って、比較対照すべき情報を持っていなかったからである。

関信三は、終生、同書をフレーベルの幼稚園のバイ



ブルと考えていた。彼の幼稚園理解がいかに熟成されていったか、そのことにドゥアイの“The Kindergarten”がいかに深く関わっていたかについては、今後彼の著作を読みすすめていくなかでふれることにしたい。

幼稚園の規模

『幼稚園記』から、本稿ではふたつのことがらを考えてみたいと思う。ひとつは幼稚園の規模についてである。多少煩雑になるが、“The Kindergarten”の冒頭の数行を取りあげたい。

“This littel book is intended to help teachers to direct Kindergartens on a larger scale. It is proposed that hereafter all our Primary Schools shall begin with a course of Kindergartening, and that classes of from fifty to a hundred small children shall be gathered into one Kindergarten. Froebel's excellent system has, thus

far, not been tried on so large a scale, and whenever it shall be, it will be necessary, that the class should be temporarily subdivided for different exercises.”（下線筆者）

へ拙訳「小著は、（従来より）大きな規模で幼稚園を運営しようとする教師たちに役立つように書かれたものである。今後、初等学校はすべて幼稚園教育から始められ、幼稚園の園児数は一クラス五十人から百人になるであろう。フレーベルの優れた方法は今までそのような大きな規模で試みられたことはなかったので、それがいつになるにせよ、そうなればどうしても、課題別に一時的にクラスを分割せざるを得なくなるだろう。」

冒頭のこの数行を理解するためには、当時のアメリカの幼稚園の状況を概観することが必要であろう。

一八五五年、アメリカ最初の幼稚園が、ドイツ人亡

命者カール・シユルツの妻マーガレットによつて、
ウイスコンシン州ウオータータウンに開かれた。故国
ドイツにおいてフレイベルの教えを受けていたマーガ
レットが、自分の子どもの教育のために始めたもので
ある。彼らより先に入植していたカール・シユルツの
兄弟や親族の子どもたち、それに近隣の友人の子ども
も加えて、十数人の子どもたちが集まった。その後や
はりドイツ人の子弟のために幼稚園が開かれるが、そ
れも同様の規模であつた。幼稚園創始の地ドイツで
も、イギリスでも、幼稚園はいずれも小さな規模で始
められていた。

ドウアイの書は、そうした中でも比較的園児数が多
い幼稚園を運営してきた著者の経験をもとに、将来公
教育が幼稚園教育から開始され、幼稚園の規模が大き
くなった時に役立つようにと準備された、幼稚園新時
代の実践書ともいふべき書物であつた。それが他の文
献とは決定的に違ふ原典の特色であり、著者の一貫し

た立場であつた。

この箇所を関信三は次のように訳している。

〈関信三訳〉「此小冊子ハ廣ク幼稚園ヲ指揮スルニ於
テ教師ニ裨益アルノ書ニシテ爾後吾輩ノ初歩学校ハ必
ス幼稚園ノ法制ヲ以テ起業シ而シテ五十乃至百員ノ幼
稚ヲ一園中ニ集容スヘキコトヲ陳説セリフレイベル氏ノ
所謂ル法制ノ卓越ナルモ未ダ此ノ如キ高度ニ達セス大
凡ソ各幼稚園ニ在リテハ生徒ノ等級ヲ暫ク區別シ以テ
其課ヲ分附スルヲ一大緊要ナリトス」(傍線筆者)

原典において、著者は「large」[larger] (波線部)

と、大きさを表す語を二度用いている。一行目の
「larger」は従来より規模が大きいという意味で用い
られているが、関が「廣ク」と訳していることに注目
したい。これを規模の大きさについての表現とみるこ
ともできないではないが、後半にある「large」も
「高度ニ」と訳しているから、彼は「large」といふ

語を、量ではなく質を表わす語としてとらえたことがわかる。その結果、「フレールベルの優れた方法は今までそのように大きな規模で試みられたことはなかった」という意味の二本下線の文章を、「フレール氏ノ所謂ル法制ノ卓越ナルモ未だ此ノ如キ高度ニ達セス」と誤訳してしまった。関信三は、原著者がことのほか幼稚園の規模にこだわりを見せていることを、ほとんど意識することができなかった。

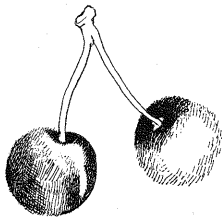
規模についての記述の緊張関係を認識することができなかつたために、彼は結果的に、フレールベルの幼稚園が本来小規模で行われてきていることを行間から読み落としてしまった。そのため、「一クラス五十人から一〇〇人の幼稚園」という表現を、今後の見通しとしてではなく、現実の数字として受け止めてしまった感がある。こうして原典の冒頭のパラグラフは、その全体が無意識のうちに変形されたのである。

興味深いことに、明治八年十一月に東京女子師範学

校の摂理となった中村正直も、「トウアイ氏幼稚園論の概旨」（文部省『教育雑誌』四号）と題する文章の冒頭に、この部分を次のように訳している。すなわち、「二個の幼稚園に五拾人、乃至一百人を入れるべし」。

明治九年六月、いよいよ園舎の工事が始まった。十一月に竣工なつた幼稚園は、同月の仮開業時には園児数七十五、学年末にはその数一五八（『文部省年報』明治十年）を数えた。

日本の幼稚園がかくも大きな規模で出発したことに ついては、さまざまな見方がある。幼稚園はアメリカ經由で伝えられたと言われているが、他にモデルがあるのではないか。あるいは建国の意志の表われとして、また、国威発揚のため大きなものを造つたのではないか、とも言



われている。後者については園舎が非常に立派であったという点から、それを完全に否定することはできない。しかし規模に関しては別の問題であろう。

日本の幼稚園の規模が大きかった理由の鍵は、この個所の訳にあるのではないか。少なくとも今はつきり言えることは、関信三・中村正直ともに、ドゥアイの翻訳を通して、幼稚園とは本来そういう大きさのものであると認識した、という事実である。特に中村正直、きつぱりとした訳は印象的である。おそらく彼らは当時幼稚園に直接関わっていた人々の中で、最も幼稚園に関する知識を持っていた人物であろう。「一箇の幼稚園に五拾人、乃至一百人を入れるべし」という認識が、新時代の全く新しい教育施設を、という自負とあいまって、かくも大きな規模の幼稚園を構想させるに至ったのは必然と言えよう。ここに、アメリカ経由で入りながら独自の姿をとった、日本の幼稚園の原点のひとつがあると私は思う。

音楽

『幼稚園記』でもうひとつ取りあげたいのは、音楽に関する記述である。もつと正確にいえば、音楽に関する記述のなさについてである。

“The Kindergarten”はたくさんの歌を収録していた。もちろん楽譜つきで。なぜなら同書はひろく幼稚園で活用されることを目的として書かれた実用書で、すぐに使えるような楽譜つきの歌は同書のセールスポイントであった。けれども関信三は、歌詞だけを翻訳し、楽譜は紹介しなかった。

彼がカットしたのは楽譜だけではない。ドゥアイは保姆の資質のひとつに音楽の素養をあげているが、彼はその一文だけを完全に抜いて訳した。彼が抜いた原文は次の通りである。

A tolerble voice, pure and strong, and some musical training(so as to accompany with the piano)are also

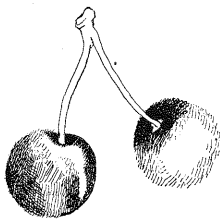
ちなみに中村正直は前述の「トウアイ氏幼稚園論の概旨」の中で、この一行もそのまま訳している。曰く、「この婦人は声の清て且つ大にして又音楽を解するものなるべし、ピアノも大会衆の時には入用たるべし」。もちろん、創設された幼稚園には高価なピアノが備えられた。

では、関信三はなぜ音楽を紹介しなかったのだろうか。当時、一般には洋楽にふれる機会はほとんどなく、仮に洋楽譜を見ても、一体それが何を意味しているのか見当もつかない、という状況にあった。だから『幼稚園記』に音楽が紹介されなかったのも、やむを得ないことかもしれない。幼稚園が開園され、ようやく唱歌が作られても、保母も園児も雅楽の調べに合わせずむずかしい歌詞の歌を歌い、遊戯をしなければならず苦労だった。小学校の教科でも「唱歌」とは名ばかりで、実際の導入には十年待たなければならなかつ

たことを思えば、残念ながら、洋楽にふれたことのない当時としてはやむを得ない処置であった。と、そのように一般に考えられている。しかし本当にそうだろうか。

『幼稚園記』の翻訳者は関信三である。関信三は自身の体験から洋音楽を知っていた。関信三ほど直接洋楽にふれた経験のある者は、当時の日本にはまれだったのではないかと私は思う。

キリスト教の中でも特にプロテスタントは、「歌う宗教」と揶揄されるほど、歌、すなわち賛美歌を多く用いる。関信三が安藤劉太郎として横浜の宣教師たちのもとに出入りしていた頃、彼自身も英語賛美歌を歌っていた。子どもたちも賛美歌を歌っていた。日本人が洋楽曲を歌うのは至難の技と考えられていたが、実際には、大人



も歌い、子どもたちはなおのこと、わずかの間にやすやすと歌いこなしたのである。関信三は日本人が洋音楽を歌い、かつ演奏までできることを知っていた。さらにその後、彼は西欧に旅立ち、英国に暮らした。彼は英国において、禁教下でのあたりをはばかり賛美ではなく、朗々たる教会音楽と親しく接したのである。ドゥアイの書に掲載された楽曲は、賛美歌や一般の洋楽曲と同じ表記の仕方である。『幼稚園記』に音楽に関わることを一切載せなかったのは、彼が洋楽譜、洋音楽を知らなかったからではない。

『幼稚園記』における音楽の扱いを理解するためには、どうしても彼とキリスト教との関わりについて考へざるを得ないだろう。関信三の体験から考えると、彼にとつての音楽の総体は、教会音楽であり、賛美歌だったからである。

彼が滞在した英国は宗派としては聖公会、すなわち英国国教会で、英国女王は英国国家元首であると同時

に英国国教会の長でもある。彼のような背景を持つものにとつて、英国はことさらに興味深い対象であつたことだろう。そびえ立つ教会の尖塔と、故国とは比較にならない繁栄。幕末・明治初年、海外に学んだものは多いが、彼のように滞在国の宗教そのものに意図的に近づき、そこから故国の将来に思いを馳せたものは極めてまれであらう。

当時彼は強大なキリスト教国を受け入れ、それに学ばなければならぬ現実を認めていた。彼はキリスト教国と呼ばれる社会のあり方を冷静に観察し、すでにキリスト教を邪教とする考えから脱却していたと思われる。彼はキリスト教について深く知ろうと努めた。しかし、聖書を研究しキリスト教を知ろうとするときには理性が働くが、賛美歌を歌うことは感情の表現に属するのである。

『幼稚園記』における音楽の扱いは、彼の諜者としての体験が、彼自身が認識していたであろう以上に彼に

痛手を残していたことをうかがわせる。居留地での体験のうち彼を最も痛めつけたのは、洗礼を受けたという事実よりも、むしろ彼の日常の生活だったのではないか。偽って信仰生活を営み続けることの過酷さ。自分が否定しているものを肯定していると見せ続ける生活。自分自身が抱いている感情を偽り続けることは、

自分を偽ったり、事実の如何を偽ったりするより耐え難いのではないか。感情を抑制して表現する傾向が強い当時であって、偽りの感情をあらわにしなければならなかった苦しみと抑圧の大きさ。憎悪に近い感情を抱いていたものを人前でたたえる嫌悪感。大人が人前で声をあげて歌うなどという恥ずべき行為を、邪教徒と肩を並べて繰り返す屈辱。いたいけな少女たちが異教の歌を歌わせられている「国辱的」光景。彼はこうした毎日を、ただ感情を押し殺すことよって耐え続けていたと思う。彼を支えたのは使命感であった。彼は宗門を守るために、また正義のために戦っていると

信じることよって、このような生活に耐え続けた。にもかかわらず、彼はやがて、すべてが水泡に帰したことを知る……。『幼稚園記』での音楽に対する扱いは、関信三自身の意識的な努力では抑えられない、彼の特異な個人的体験の中で培われた感情に強く影響されたものであると私は思う。

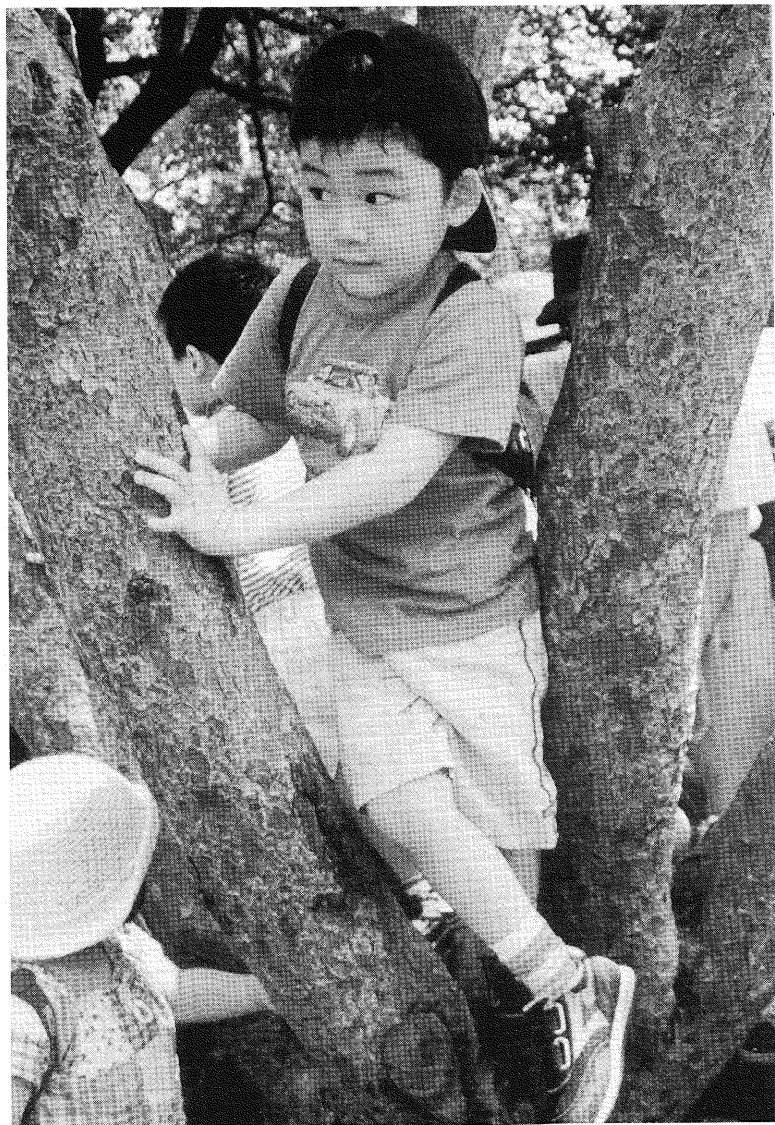
関信三は、唱歌の素材を、洋音楽ではなく、全く別のところに求めた。それが雅楽であった。明治十一年六月に刊行された『幼稚園』おとこのその下巻には、「音楽體操の事」として「手引草の歌」が紹介されているが、『幼稚園記』にならって歌詞のみ訳出され、楽譜は収録されなかった。関信三が『幼稚園記』で楽譜を紹介していたら、幼稚園の唱歌は全く違ったものになっていたことだろう。

今回は、関信三が自らの意思で翻訳に乗り出した『幼稚園記附録』について書いてみたい。

ある日

撮影・平野 清







私が幼児教育を志した頃 (18)

津守 真

バチエルダ家

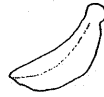
リチャード・バチエルダ氏は弁護士だった。弁護士にありがちな鋭いところがなく、静かな人で、ミネソタ大学で非常勤講師をしていた。私がアメリカに来るための書類はバチエルダ氏が作成されたことをここに来てはじめて知った。ヴェスタ夫人は穏やかな美人である。家はそんなに大きくないが、端然としたきれいな家だった。娘のアンは十六歳で、背が高くて、身なりを構わず、大声で賑やかに話す普通の女の子だった。息子は十二歳で、私が行くのを待ちかねていて、アンティーク自動車の行列を見に行こうと一緒に自転車に乗って見に行った。行列は予定より一時間も遅れて



二、三分で通りすぎてしまった。

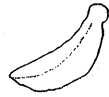
パチエルダ夫人は料理が好きで、每晚自分で食卓の飾り付けをして、私は夕食が楽しみだった。日曜日の朝は、特別にマッフィンを焼いた。一九五〇年代初めのアメリカの家庭は、主婦が家庭料理を作るのが普通だった。パチエルダ家ではよくアップルパイを焼いて、夜になってから皆で居間でしゃべりながら作りたての熱いパイを食べた。私が行って一週間ほどたったとき、興味があつたら古い家族写真を見ないかとパチエルダ氏夫妻が私の部屋まで呼びに来た。結婚式の写真はハリウッドのスターのようだったし、子どもたちが小さいときの写真は自然に人柄と愛情がにじみ出ていて感じがよかった。どこの国でも家族は皆同じだとあらためて思った。それを見ながら私は愛育研究所の先輩の児童心理学者の竹田俊雄先生のことを思った。先生には多勢の子どもさんがおられたが戦災で家を焼かれて、その当時、三階の研究室の隅をカーテンで仕切つてひとりて生活しておられた。先生は一着のモーニング（礼服）を昼も夜も着ておられた。あるとき私が見せていただいた写真は、和服姿のご夫妻と子どもさんが床の間の前で火鉢を囲んでおられる家族写真だった。戦前の東京ではごく普通の風景だった。私は敗戦直後の日本の家庭と社会の現実とを対比して考えた。パチエルダ氏夫妻が結婚したのは十九年前とのことで竹田俊雄先生も同年配である。

パチエルダ氏夫妻とはときどき夜遅くまでしゃべった。私は自分の意見を率直に語



り、自分が話すことが知的に受け入れられるのを感じた。話しているうちに分かったのだが、バチエルダ氏は共同募金協会の専門の弁護士で、離婚、家族問題、児童保護の相談が専門だった。こういう人が弁護士をしていればその市は良くなるに違いないと思った。バチエルダ氏から子どもと家族に関する法律の本を二冊サインいりで頂いた。バチエルダ夫人は清潔好きで、整頓された居間にはいつも厚いカーテンがかけてられて薄暗かった。自分は光が眩しくて苦手なのだと言っておられた。(バチエルダ夫人は一九七〇年頃に失明されてケアつき病院に入れ、間もなくご主人のバチエルダ氏は亡くなられた。夫人は目は見えないがいまも健在である。私が一九九六年にそのホームを訪ねたときには、ミネソタ大学の訪問教授システムを活用し、毎週、文学や社会学の講義を受け、大学の単位をいくつも意欲的に取っておられた。)

日本から私に届く友人や先輩からの手紙には、ミネソタのような田舎ばかりにないで、大都市にも行きなさいと書いてあったが、私はこの美しい町に留まって家族ぐらゐるみてこの人々と付き合う生活が好ましかった。バチエルダ氏はニューヨークに行ったことがないし、トンプソン夫人もワシントンに行ったことがなかった。まして敗戦国の一留学生が東部にまで旅行するなど想像もできなかった。しかし東部に旅行する機会は思いがけず早くに来た。バチエルダ家に滞在していたとき、私はイリノイ州ジャクソンヴィルで開催された世界キリスト教学生青年会議に出席することになっ



た。私はそのついでに、かねてから興味があった進歩主義教育の歴史を国会図書館で調べるために、米国の首都ワシントンDCにまで足をのばすことにした。

米国の進歩主義教育の歴史

前に記したように、私は岡部弥太郎先生からフレイベルを学び、フレイベルの幼稚園が米国で批判を受けたのは知っていたが、フレイベルの何が批判され、何が進歩主義教育に継承されたのか、疑問のままだった。その後、私は愛育研究所で、山下俊郎先生から、ヴァンデウオーカー・N・C著『アメリカの教育における幼稚園』を見せられた。一九〇八年に出版されたその小さな書物には、十九世紀半ばのピーボディの幼稚園創始から進歩主義教育に至る米国の幼稚園の歴史が記されていたが、それを担っていた人たちがどのような人だったのか、それがどのようにして現代の幼稚園につながるのかは分からなかった。

ミネソタ大学児童研究所は、進歩主義教育の最盛期である一九二五年の創立で、付属のナースリースクールは遊びを主としていた。ミネソタ大学で幼児教育を担当していたDrエリザベス・メチャム・フラーの講義では、私は教少ない学生の一人だった。児童研究所の隣の建物がナースリースクールだったので、私はしばしば幼児と遊びに出かけたし、お茶の水女子大学附属幼稚園と共通点があったので、主任のミス・ヘッ



ドリとはよくおしゃべりをした。彼女はACEI（万国幼児教育協会）のリーダーで、幼稚園の実際の著書があった。私の指導教官であるハリス先生からは児童研究所のテーマのひとつであるグッドイナフの描画テストの実験的研究のテーマを与えられていたが、思いきってこのことを話した。せっかく米国まで来たのだから、自分だったらあなたが言うように自分の関心を追求するだろうと言われた。夏になる前から、私はミネソタ大学図書館の中にキャレル（大学院専用の個人机）をもらっており、必要な文献の見当をつけていた。私が目を通したいと思っていた雑誌に欠本があり、ワシントンの国会図書館まで行けば見つかるだろうと期待していた。

人種国籍を越えて―世界キリスト教学生青年会議

一九五二年八月二十七日に、私は世界キリスト教学生青年会議に出席するために、ビルグリムファウンデーションの学生四人と一緒に自動車で朝四時半に出発した。ミネソタからは私の親しい学生が更に数人加わって心強くなった。世界会議といっても米国人の学生が大部分で、それに米国に留学していた外国人学生が加わった。自然に恵まれた美しいキャンパスで、朝は緑の木陰でのめいめいの聖者研究から始まり、基調講義、討論と四日間つづいた。私はいつも日本の国を対比して考えていた。当時の日本の社会には貧民窟が満ちており、年に一〇〇万の人口増加率で、そのなかで人間



が育ち、その人間のために何ら準備もない。豊富な経済力と広大な土地と白人種とが結び付いてでき上った大國アメリカとの対比は大きかった。集まった人たちは皆良い人たちのだがそういう中にいると、孤独を感じさせられた。神学者ビル・イーストンの基調講義は、人間は究極において孤独 (aleness) であるということから始まった。人間は自分を十分に理解してくれる人を見つけて結婚して家族をつくる。けれども自分の存在意識は自分だけしかもっていないもので、その意味で、人間は孤独であり、ただひとりである。その孤独が友情の土台でもある。しかしながら、人種、国籍を異にする人々の間に本当の理解があり得るのだろうか。人種国籍を越えて友情はありうるのかとビル・イーストンは問いかけた。

当時の米国では、州によつては黒人はバスの座席も異なり、白人のレストランに行くと断わられた。私のいたミネソタではそういうことはなかったが、それを体験した外国人学生たちは、民主主義の國アメリカでこんな差別が行われていることに憤慨した。米国人の学生たちはそれに良心的に応答し、討論は夜まで続いた。黒人差別の行われていた南部出身の学生たちも、率直に自分たちの非を認め、どうすればよいかを本気に考えた。

ビル・イーストンはロマ書十一章十二章を引用して神学者の立場で明快にそれを語った。人種国籍を越えた愛を、身をもって示したのがイエスである。そのイエスに



よってユダヤ教は一民族の内部のものではなく、民族を越えたキリスト教になった。イエスに結ばれて人種の差別は消滅する。それを生活の中で実践することがいまま求められていることであり、それがなければいつまでも世界平和は来ないだろう。イエスはいまもお、我らの間に来たり、汝ら互いに愛すべしと語りかけている。人は常に心を新たにして自分を変えられねばならない。

ひとつ仮定を立てて見よう。神の前には国籍もなく、人種もなく、職業の貴賤もなく、地位の上下もなく、皮膚の色もない。もしそうならば、人は互いに互いを裁きあったり、排斥したりできないだろう。それなのになぜ人は互いに差別しあうのだろう。自分というものがこびりついているからである。自分はこういう地位をもっている。自分はこういう能力をもっているというような。いったいどこまで自分がつきまとい、自己を誇る気持ちがついてまわるのか。神の前に平等になつて等しく結ばれた人たちが経験を分かち合い、物質を分かち合い、魂を分かち合つて、新しい社会をつくること、それが平和への道ではないか。

この時から三〇年後に米国で黒人の差別撤廃が実現した。もちろんこれは多くの人々の努力の結果であるが、当時の米国の青年たちの力もそれに加わっていたであろう。

四日後、最後の聖餐式を終えて、再び友人の車に同乗し、夜通し東へ東へと走り続



け翌日の夕方、ワシントンDC行きのバスに乗った。

ワシントン

ワシントンでは北川先生やトンプソン夫人から紹介された家庭に泊めていただくことになっていた。最初の三日間泊まった日系アメリカ人二世の竹下さんは、国会図書館で医学雑誌の日本語翻訳係りをしておられたのは幸いだった。早速私はワシントンに来た目的を話し、翌日は竹下さんに案内されて国会図書館に行った。日本語の蔵書の量に圧倒された。三木安正編の『精神薄弱児の教育』の中に私の書いたものまであった。竹下さんは、日本の古典に親しむことは日本人以上で、真摯なクリスチャンで、アメリカの政策の批判家でもあった。こういう日系人がここで重要な地位を占めていることを私は誇らしく思った。一世の竹下さんは四十年前に米国に来て孫が四人いた。刺身とお茶漬けをご馳走になり、久しぶりに日本の味にふれた。進歩主義教育に関する文献については私が期待していたほどのものはなく、丸一日を割くだけで済んだ。途中、偶然に米国公文書館で日本の降伏文書のオリジナルを見た。裕仁と署名してあった。ならんで梅津大将、島田大将の署名があった。梅津大将の字は立派だった。



コロネル・ド・ギャンの家で

ワシントン滞在の最後の日、このシリーズの(5)に記したが、占領軍に接收されていた私の家に泊まっていたコロネル・ド・ギャンの家を訪ねた。ワシントンの郊外にあるその家は、典型的なアメリカ人の家で、夫婦で働いていた。私の父がだいじにしていた屏風を見たときには一瞬心が騒いだだが、一留学生の私は、占領軍時代の上下関係とは一切関係なく親しく迎えられた。コロネル・ド・ギャンは軍の齒科技巧師だったが、もともと偉ぶったところがなかったが、今回は軍服ではなかったので一層親しみを感じた。あのころ幼児だったサンドラは十歳になり、その下に三歳のキニーともうひとりの赤ん坊がいた。ド・ギャン夫人は以前からのヒステリーが一層ひどくなっていて、児童心理学を学んでいた私にはそれが気になった。どこの国にもいろいろの人がいるのは当たり前だが。母親は、キニーが外で遊んでいるとピアノの練習をしなさいと呼びいれ、三十秒もたたないうちにピアノの音を静かに、赤ん坊が起きると怒鳴る、また一分もたたぬうちにご飯ですよと言って呼び、それから十五分もたってからようやく夕食になるという具合である。キニーは頭がいいから母親に適当に合わせていた。昨夜は母親がサンドラの爪を切っていて深爪をし、サンドラが痛いというのに、そんなことで泣くのはみっともないと言って叱る。とうとう深爪でひどく血を出した。



サンドラは、私がスーツケースをつめているところに来て、帰ってはいやだと泣いた。彼女は学校を二カ月前に転校したばかりで、学校がいやでしようがないと私に訴えた。夕方薄暗くなるまで私の傍らを離れないで、家の前の階段に腰掛けて一緒に空を眺めていた。私は心を後に残しつつ、ド・ギャン夫妻が帰宅する前に辞去した。

久し振りにミネアポリスに戻った私には日本からの懐かしい手紙の束が待っていた。バチエルダ夫人の家庭料理を食べて薄暗い居間でワシントン旅行の報告をしながら、私は長い旅の後に自分の家に帰ったような落ち着きを取り戻した。秋の学期からはミネソタ大学児童研究所の全教授が参加して「児童発達…運動、知能、言語、社会」が始まることになっており、また、Drジョン・E・アンダーソンの上級セミナー「発達理論」の受講を私は許可されていた。パーソナリテイ理論のH・A・マレーやO・H・マウラーを取り上げられることになっていて、二十六歳の私は自分の本来の学問に取り組みことに心が踊った。

『幼児の教育』と私

私の「幼児の教育」時代

佐藤 和代

いつも仕事をもらっている某女性向けパソコン雑誌から「次号は家族新聞をとりあげます」との連絡がはりました。

打合わせに出向くと、まずはこれを見て下さい、と大きな机いっぱいに広げられたのが、読者から届いた家族新聞の山。うわー、こんなにある

の。どれも写真いっぱい、イラストいっぱい、色とりどり。

「人気あるんですよ、パソコンで家族新聞作るのが。でもねえ、内容はねえ……」。ばらばらと手にとると、ほとんどは我が子の成長をしるした新聞で、「やった！ ○○くん、とうとう寝返

ぶり子育てにつかっている時代は、子どもがああしたこうしたという話が頭のほとんどを占めています。頭のどこかでこれではいけない、もつと社会に目を向けようなんて思いつつも、どうもあらがえない。

*

子育ての中の家庭の中には、ちよつと世間とは別の時間が流れます。職場ではテキパキ仕事をしているお母さんでも、家に戻ると幼児番組を見ながら一緒に踊ったりしているのでしょうか（というのは単なる想像で、うちだけだったかもしれない）。

育児日記を連載していたころ、一度書きたいと思いつながら書けなかったテーマがあります。それは「子どもを迷惑がるそっち側が変だ！」という話。そっち側というのは、大人だけの論理でもの

を言う側ですね。ふたこと目には「しつけがなっていない」「今の母親は子育てがへただ」と言い、新聞に投書なんかする人たち。

そういう投書に反論するというのは、家族新聞ならともかく、雑誌上ではちよつとはばかられてやめておいたんですが、『子育てにどつぶり』時代の親の目から見ると「そっちが変よ」と言いたくなることって多いんです。「病院の待合室で子どもがうるさい」という声。ただでさえ病気で機嫌の悪い子が、こんなに待たされて、おとなしくしてられると思うの？「電車のホームで子どもを叱りつける親。叱るくらいならちゃんと手をつなげ！」という声。わかっている片手に下の子、片手に荷物だったりするんですよ。

だいたい、まわりに子どもの影も形もないという社会って変なのでは？大人のまわりにはうるうると子どもがいるのがあたりまえでしょ、人口

の比率から言っても。それがどうして、ビジネス街には子どもがいないの？ そういうところにばかりいるから、子どもの粗野なところが許せなくなるんじゃないの？ それが効率第一主義につながって、社会を閉塞させているんじゃないの？

*

私は子どもを育てていなかったら、たぶん



『そっち側』の論理しかわからなかった。幼児のいる家庭という『こっち側』にどっぷりつかって、はじめて見えてくるものがあるんですね。今はまた大人だけの社会に戻りつつある私。子どものいない都心で効率よく仕事をすすめ、『子連れお断わり』の喫茶店でくつろいだりもします、すいません。

でも、家の中に幼児がいた頃感じていたことはちゃんと形をとどめていて、あまり効率主義に

おちいりそうなときには、ピコーンピコーンとウルトラマンの警報が鳴り、アンパンマンのテーマ曲が頭をかすめます。あんまり、そっち側へ行き過ぎないでねと。

*

今まさに『我が家の幼児の教育時代』にある方たち、家族新聞でも日記でも、書き残しておきませんか。たぶん「我が子が寝返りをうった？それがどうした」と言われるでしょうけど。でも、そんなことの書ける時代は、けっこうすぐに過ぎていってしまう。そして、忘れてしまうにはあんまりにもつたいない時代だと思えます。自分のためにも、大きくなったら読んでくれるであろう子どもたちのためにも、何か残っていると楽しいです！

しかしこれは、かなり言い訳っぽいかも…。

連載していたころの日記を一冊の本にしていたので、ときどき自分でも開いてみます。だいたいは「あ、親バカしてるな」と赤面してすぐ閉じてしまいます。家族新聞をすすめるのは、ひとりじゃ恥ずかしいから仲間になってよ、という理由だったりして。どうも、失礼しました。

(フリーライター)

短い冬の季節でもらったもの

霜柱に出会った子どもたちの記録から

阿部 康子

はじめに

当園のある豊川市は車で三河湾へ十五分、浜名湖西岸へ三十分という距離にあり、愛知県の西南に位置している。日当たりのよい場所では十二月中旬より「菜の花」が咲き始め、二月立春をすぎると「つ

くし」が顔を出すといった暖かな地域で、過ごしやすいが、四季の中でも冬季は短く、子どもが冬の自然現象、雪や氷に出会う機会は少ない。したがって、この時期の保育では、子どもたちに冬らしさをどこで感じさせるか、保育者にとって一つの大きな課題となるのである。毎日の気象情報から目が放せ

なくなる時期でもあるが、今年は一月、二月と思いがけない寒気団の到来で、子どもたちの園生活にも冬の季節にこそ、の出会いが数多くあり、子どもにとって保育者にも心弾む日々が生まれた。そんな嬉しい日々の出来事の記録から、子どもの行動を「子どもが育つ」という観点でとらえてみた。

一月十一日(木)

三学期が始まって三日目、子どもたちが降園したあとの職員室は、子ども一人

ひとりが過ごしてきた冬休みのあいだの出来事、
〇〇ちゃんは家族でスキー体験をしたんだって〇〇ちゃんのところへ赤ちゃんが無事生まれましてお兄ちゃんになったのよ〇〇等々、教材準備をしながらの楽しいおしゃべり。A先生の「来週は寒波が来る

◀大事にひき上げた水を見せる



そうよ。風邪ひきさんが出なきやいいけどね」の発言に、私は「そうだ！ ひよっとしたら氷が張るかもしれない、水をバケツに張っておこう」と思い立ち、ポリバケツ、洗面器に水を張り、庭に出して帰宅した。

一月十二日（金）

A先生の情報通り、昨夜からかなりの冷え込みとなり、まさに冬を感じさせるに充分な朝を迎えた。気になっていたバケツ、洗面器を出勤一番にそつとのぞく。「出来ていました！ 出来ていました！」そつと水の表面を指で押すとそつと水に沈み、出来立ての氷の薄さが伝わってきた。うっかり触るうものならたちまち砕けてしまいそうな氷である。出来立てのこの姿を子どもに見せたい、私の用意したこの冬一番の初氷とどう出会わせようか、わくわくしながら子どもの登園を待った。

八時三十分、「せんせいおはよう」と、まつお、やすひろ、ゆうか、けんちが登園、つづいてまさと、かずき、かよ、はるなど登園、頃合を見計らって子どもたちへ「いいもの見つけたよ、見に来る？」と氷の張ったバケツ、洗面器のある裏庭へと誘う。バケツと洗面器をのぞいた子どもは「これ、

氷？」と私を見た。まさととは「冷蔵庫で作ったのでしよう」と言う。もつと「わあ！ 氷だ、スゴイ！」と驚いてくれるのを期待していた私は少々拍子抜けで、「ほら、指で触ってごらん」と氷に触れるよう促した。と、「ツメタイ！」とゆうかが驚いた表情で「どうやって出来たの？」と不思議がった。かずきは「本当の氷なの？」と不思議顔。温暖で、一年を通して雪が降る、氷が張る、という冬の自然現象に出会うことがほとんどない日常生活の中では、「氷が張る」という自然現象への興味が今一つピンとこないのだな、と思いつながら氷の張ったバケツと洗面器を皆で保育室へ運ぶことにした。ねえ、氷ってどうやってできるの？ のゆうかの疑問にどう答えものか、気温が〇度に下がったら氷は凍るのよなど、私にはうまく伝えられない、どうしよう……。そこで、寒い冬はみんなが眠った頃、北風に乗って凍る爺さんがやってくるのよ。凍る爺さ

んは水の子が大好きで押しくらまんじゅうをして遊ぶんだって。ヨイシヨ、ヨイシヨと押しくらごっこをしているうちに水の子どもはどんどん固くなつて、透き通つて、綺麗な氷になるの……、と素話として話す（内容は省略）。子どもたちは「ふうん、ほんとかなあ？」といった表情。すると、かずきが「ぼく水を入れておこつと」と動きだす。それに続く人が出て、何人かがままごとのフライパンや鍋、ボールに水を張り、思い思いに寒い場所を探して置き、降園した。

一月十五日（月）

今朝も冷たい空気がピンと張り詰めたまさに冬を感じる朝であった。登園の早い四人が「せんせいおはよう」と声を掛け、「氷できてるか見てくる」と鞆をかけたままの姿で水を張った自分の入れ物を見に走って行った。

しばらくして「せんせい、氷ができとつた」「ほんとの氷だに」と四人が口々に目を輝かせて驚きと嬉しさを顔一杯に広げて、氷の張ったバケツやボウルを見せてくれた。「よかつたね、ゆうべは寒かつたからきつと凍る爺さんがきてくれたんだ」「ぼくとここなかつたに」「お水入れておいた？」「うん」。そんな話をしていると、登園したかずき、まさみちが「お池にも氷ができとるよ」と知らせ、それつとばかりに皆が池に向かった。保育者もバケツを片手に子どもその後を追う。しゅんが「これ、これ」と大事に引き上げた氷を見せる。そのうちかよやはるな、れいたちが園庭のあちこちにできた水溜まりに張っている氷に気付き、バケツへと収穫、次第に氷の美しさ不思議さから、誰がたくさんの氷をすくい上げるかに変化してにぎわっていった。今日も子どもたちは「入れ物に水を張ってお外に出しておく」、と入れ物に水を入れ、ゆうか、かよ、まこ

私たちは色水で氷になるかやってみる、と水性マジックで色をつけた赤やピンク、青色の水を張って降園した。

一月十六日（火）

子どもたちは今朝も登園するなり昨日水を張っておいた自分の入れ物を見に行く。そして「氷ができてしまった」「ぼくのもの」「わたしのもの」と嬉しそうに、手に手に鍋やボウルにできた氷を見せてくれる。色水を張った女児たちは赤やピンク、青色の氷に「きれい！」とうっとり。でも「ぼくのできとらん」と何人かが訴えてきた。「どうしてかな」とどうして氷になったのか、どうして氷にならなかったのかを子どもたちと話し合う。まず、水を張った入れ物を置いた場所はどうだったかが話題になり、ワイワイ話し合ううち、北風がいつぱい吹いてくる寒い場所に置かないと氷はダメ、となり、再びトライして降

園した。

一月十七日（水）

「お外で本当に氷が氷になるのかな、やってみよう」から始まった氷作りが今日で四日目になった。この遊びは日に日にクラス全体に伝播して、どこかで皆がかかわっていることは嬉しい。幸い寒気はまだ続いている。今や子どもたちは登園したらまず一番、氷のできぐあいを見に走る。そして友達と、氷の厚みはどうか、形はどれが面白いかなど話し合いながら今日の遊びが始まっていく形となっている。



▲水溜りに張っている氷をバケツへ収穫

今朝は又一段と冷え込んで冷たい！けれど子どもは、水のできぐあいが気になり、園庭に出て行く。やや時間が経って園庭から「せんせい、せんせい、ちよつときて」と大声でまさどが呼ぶ。「どうしたの？」「ちよつときて、しもばしら、しもばしらがある」と叫ぶように言うので私も思わず咄嗟にバケツを持ってまさとの後を追った。そこは昨日水を張った鍋やフライパンを置いて氷がでるのを待った場所。保育室の北側すなわち裏庭であり、小さな滑り台の下ではすでに多くの子どもが、スコップで土を掘り起こしていた。

まさどはその子どもたちの間から大きな土の塊を一つ手の平にのせ「せんせい、これ！」と見せてくれた。まさどの手の平で六角形の氷柱がきっちりと並んでムクムク土を押し上げていた。思わず「スゴイ！ きれいなね」と久し振りに出会った霜柱にすっかり興奮してしまった私は、かよやかなえ、みほたちを誘ってまさどと一緒に園庭のあちらこちらを霜柱を探してまわった。築山の裾にある、というのを探しているときまさどがきて「せんせい、水玉模様のあるところを掘ってみい」というのでよく見ると、土の表面に小さな穴がブツブツと無数にあいている場所がある。シャベルを入れると土が持ち上がり、その下には太い立派な霜柱が朝日を受けて光っていた。見事な霜柱であった。目が慣れてくると、築山のあちこちにいっぱいできていた。かよが「やつぱり凍る爺さんはいるんだ」とみほに真顔で話している。みほが「どうしてこんなにいっぱいきたのかな」と言うのに、「ようちえんは楽しいとこだからきたんだよ」と答えている。

登園した子どもが次々に参加して、やがて園庭の隅々では群れて土に這う子どものおかしな姿が出現し、霜柱探しは盛り上がった。

霜柱探しが一段落したところで、今日一番の発

見！ 霜柱をどこで発見したか、皆で情報交換をすることにしました。子どもたちは互いに「おやまのむこう」「年少組さんの前」「滑り台のどこ」と話すが、「おやまのむこうって池のどこ？」「ちがうよ、こっちのすべれるとこの下」「うん？」ということ
で互いの共通理解が持ちにくいことから話し合いは
騒然とするばかり……。『そうだわ、せんせい
が地図を描くから発見場所を丸を書いて皆に知らせ
てあげようよ』と小さな移動黒板に園庭の地図を描く。
地図に書き込む という初めての経験を面白がって
子どもは次々と書き込んだ。すると、いろいろな場
所で発見があったということに気付いたり、「やつ
ちゃんと一緒のところで発見したんだ！」とかずきは
やすひろと笑い合う、そんな姿が出たりして、地図
へ書き込むという作業は子どもたちに新鮮さをもつ
て受け入れられたようであった。「せんせい、ほく
にも地図作ってよ」「わたしもほしい」の声に押し

れて、「じゃあ、しもばしらマップを作ってみる」
ということ、二十六枚の地図を用意すること
になった。

一月十八日（木）晴

マップを用意して子どもの登園を待つ。登園の早
い子どもたちがしもばしらマップ一番隊として（霜
柱の記号は丸）地図を片手に鉛筆を持ち出かけた。



▲スコップで土を掘り起こすと…霜柱が！

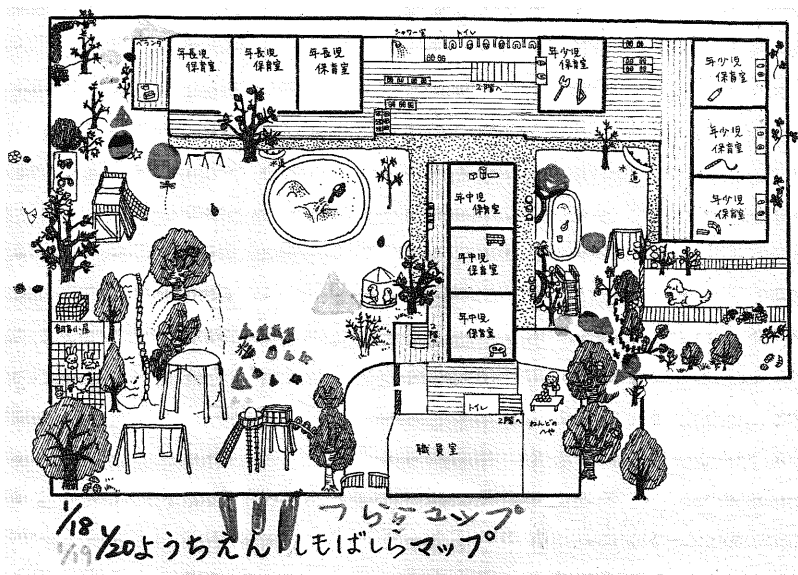
次々と登園した子どもも地図を持って後に続いた。シャベルで土を掘ったり、土を指で持ち上げたりしては、友だちと喋り、遠くで探している友だちに「こつちにあるよ」と大声で知らせたりしながら自分の発見場所をマップに書き込んでいく。楽しげなやり取りの中にも真剣さが伝わってくる姿であった。

一月十九日（金）

昨日に続いて今日も登園一番の遊びが、マップ片手に霜柱探しで始まった。十五日（月）の水探しで出発したこの遊びが、霜柱発見という新しい展開をして今日に至っている。更に、昨日からは「しもばしらマップを作ろう」と、新たな要素が加わった遊びになってきた。保育者としては、この遊びが何時までつづけられるのか、いくら子どもが面白がっているからといっても興味の持続には限界があるこ

と、特に日常的に繰り返られる遊びとは違ったものであることも考え、終わりをどう迎えるかが気になりだしている。そんなことは関係ない、というように、まさみちがマップを持って「昨日は緑色で書いたけど、今日は何色にしたらいい？」と聞く。「そうか、昨日と今日は色を変えないといけないね、何色がいいと思う」と無責任な私の答えに、「昨日緑色だったから今日のはオレンジにする」とオレンジ色のマーカーを持って園庭へ出掛けていった（この記録が左ページのマップ）。

こうして「しもばしらマップ作り」はつづいていくが、一月末頃より寒気が緩み始め、探しても霜柱の姿が見つからなくなると、子どもたちの間で「しもばしらはどこへいったのかな？」「おひさまがいるもんで出てこんだよ」と、しもばしらの行方について会話が繰り返されるようになり、この遊びは中断される。一方、園では「お餅つき」「誕生会」「お



別れ遠足「節分」と行事が続き、二月も半ばには入り、保育者がいよいよマップ作りは終わりにしようと考えた時、再び寒気団の到来となった。

二月十七日（土）

寒波が戻ってきた朝、子どもたちは久々に力強い霜柱を見つけ、太くて長いつららもこの日登場し、マップへの記入は再び盛り上がった。

今月末に生活発表会が行われることから、子どもたちは今「しもばしら発見と凍る爺さんのお話をしよう」と張り切っている。こうして、子どもたちと保育者（私）の冬の季節は終わった。

（愛知県豊川双葉幼稚園）

カッター 筆者

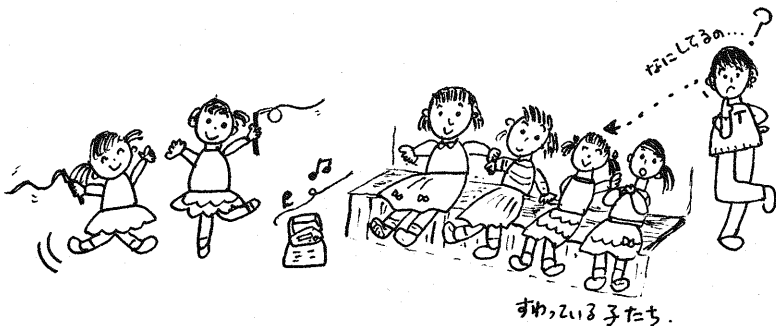
目をこらして (14)



女の子たちが八人で、遊戯室で遊んでいた。様子を見に行くところ、舞台のところに六人が腰掛けていて、あとの二人が遊戯室を走り回っている。そして、そのメンバーが時々入れ替わる。しばらくそのようにして遊んでいる。何を楽しんでいるのが分からず、そばで見ていることにした。舞台のところに腰をかけている子たちは、つまらなそうな顔をしているように見えた。

「あなたたちが、走るところも見たいなあ」と話しかけてみても、しらーつという感じで反応がない。なんだ、なんだ、この感じは！、と私一人悶々としながら、繰り返される遊びの様子を見ていた。

するとしばらくして、走っていた子たちが、パッと並んで立ち、「これで中学校の運動会は終わりです」と言った。えーつ、ということとは？　と思いつつ、ずっと座っていた子たちの方を見ると（そうよ、ようやくわかったの！）とでも言いたそうな顔でうなずいた。「私たち、お母さんだったの。だから見てる役だったのよ」という声が返ってきた。





耳をすまして

走らないのには訳があった。お母さん役をやっていたからなのだ。そう分かったとたん、全ての行動の意味が見えてくる。さつきまでとは違う風に子どもたちが見えてくる。初めから分かればよかったのだけれど……。

こんな風に、子どもたちのつもりや訳が分からずにとんちんかんなことをして反省する毎日である。

小さな石を集めていたなぎさちゃんとゆみちゃんの一言も思い出に残っている。

二人は、その石にボスカできれいな模様や絵を描いて、ついこの間死んでしまったモルちゃんのお墓の飾りを作っていた。それがあんまり素敵だったので、思わず「先生にも一つ描いて欲しいなあ」とつぶやくと、二人は一瞬沈黙してしまっただ。それから、大きな目でジロリと私の方を見つめた。「だめだよ、だって先生、死んでないじゃん！」そうか、そうでしたね、もともととお墓を作っていたんだものね、と深くうなづく私でした。

聞いて納得！ その連続。そのために耳をすめます。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



石に絵をかいたら
ボスカでパイパーカー
色がぬせると
ステキ……

タンカー船とハワイ行き列車

清宮 聡子

「さようなら」の声と共に今日もクラスの子どもたち全員を引き渡し終えた。その瞬間頭の中に、一日の出来事が凄いスピードで思い起こされる。そしてそれぞれについて自分なりに「アーあの時もう少し違う言葉を掛けていれば」とか「あの時のMちゃんとNちゃんはとても良い表情をしていたな」等、玄

関前から保育室のほんの数メートルを戻る間、私の

頭はフル回転している。四月から三歳児を担任し、二学期もあと僅かと言う十二月であるが、子どもたちを送った後は毎日この様な状態で保育室に向かうのであった。

この日もいつもと同じ様に頭をフル回転させながら、保育室に入ろうとした。出入り口の前に立った途端フリーの先生と年長児のA夫とB夫が二人、木

製の汽車とレールを使って遊び初めている光景が目
に飛び込んできた。予想外の光景に驚いている私に
フリーの先生が「来たら始まってたんです」と教
えてくれた。保育室にはまだお帰りをした時のまま
椅子が円く並んでいたが、そんな事は全く気になら
ないといった様子で二人は遊んでいた。私はA夫に
ここで遊んでいることを担任の先生が知っているの
かどうか聞いた。A夫はぱつと顔を上げ、「言つて
来たよ」と答え、またレールを広げた床に顔を戻し
た。

三歳児が午前保育の日は午後の保育室は空っぽの
空間になる、今までに午後数回年長児が訪れる事が
あった。しかし、三歳児の降園後すぐの時間にこう
して二人の男児が現れ、しかもかなり集中して遊ん
でいる姿を目にしたのは、初めてであった。時計に
目をやると、そろそろおべんとう前の片付けが始ま
る時間であった。二人はどうするのであるうかと思
いながら、フリーの先生にその場は見てもらう事に

し、私は一度職員室に戻る事にした。

木製の汽車とレールで遊ぶA夫とC夫

フリーの先生から二人の事を聞き、昼食をとつ
た。「またA夫たちが汽車をしに来るかもしれない」
と思いながら、保育室に向かった。予想通り保育室
の出入り口付近から部屋の中心に向かってレールが
敷かれていた。遊んでいたのはA夫とC夫だった。

レールが先程より広い範囲に敷かれている。レール
を入れておく籠が二つ空になつている。多分隣のク
ラスの物を持って来たのだらうと思いながら、A夫
に「すごく長いレールになつたのね」と声を掛け
た。「うん、そうだよ、僕がつなげたんだ」とはっ



きりと答えてくれた。

一方でC夫は、八車両程つなげた列車を動かしながら、レールのコースを少し複雑なものにしようとしていた。A夫は更にレールを先に延ばそうとつけている。私は担任の先生に二人が部屋に来ている事を伝えに行った。先生にお話したところ、既に確認なさっていたようで、A夫は友達から砂場で遊ぶうと誘われたが、それを断って汽車遊びを選んだのだった。A夫は汽車で遊ぼうと、強い意志を持って来たのだと知った。

再び年少児の保育室に戻ると、C夫がレールをなかなかつなげず、苦勞していた。「先生ここが出来ない」と言われ、カーブする部分を作るのを手伝った。レールの連結部品が硬くはまっていて取れなかったのである。自分のイメージ通りのレールコースを作ったC夫は列車を走らせ始めた。私は二人がそれぞれに動き初めた事を感じ、彼らと少し距離をおこうと思った。保育室の材料棚を整理しながら、

様子を見ることにした。

タンカー船を作るA夫

A夫はC夫の様子を時折気に掛けていたが、自分を自分で作り上げたこのレールコースを友達が楽しそうに使っている事が嬉しいと感じている様に見える。

C夫が何やら口にしながら、列車を動かしている。「タンカーに荷物をのせまあーす」と言っているのが聞き取れた。私は「へえー港まで行くんだ、その列車」とC夫に声を掛けた。C夫は「うん、そうだよ。タンカーに乗るんだ」と楽しそうに答えた。A夫が急にプラスチックの鋳型ブロックが入っている箱の前に移動し、何か組み立て始めた。そして、素早く作りあげた直方体を横倒しにし、床を滑らせるようにし「タンカーだよ」と言った。C夫はすぐにA夫の方に列車を動かした。

そこへD夫が入って来た。「何やってるの、すこ

いじゃんこれ」と言つてレールをぐるりと見回した。「そうだよ、おれたちが作ったんだよ」と得意げに答えるA夫。「おれも入れて、入れて」とD夫がA夫に頼んだ。「いいよ」と嬉しそうに答えるA夫の表情を見て私はA夫が満足感に満たされているように感じた。自分が始めた遊びに、一人また一人と友達に加わる、そしてイメージを持ちながら楽しんで、A夫はある種の自信を得たのではないだろうか。A夫は以前からイメージを持ちながらも、それを友達と共有して遊びこむ事が出来ない場面が多い人であった。活動の途中で相手を非難することになってしまったり、投げ出してしまつたりと、担任の先生からもその点について話を聞いていたので、今日のこの展開は彼にとって良いと思つた。また、汽車のセットを使った活動が年長児にとつて、展開し易いものであつた事もプラスに働いたのかもしれない。

ハワイ行き列車

D夫は列車をレールの上で走らせながら、「ハワイ行き、ハワイ行き」と言っている。「ハワイ行き列車」という発想が面白いと思ひ、D夫に「それに乗るとハワイに行けるの、素敵な列車ね」と言つた。D夫は「そうだよ!」とにこにこしながら答えた。

その時C夫が「あーあ、だめじゃないかこれじゃ」と声を上げた。どうしたのだろうかと目を向けると、A夫が作ったタンカー船に汽車が入り切らず、つなげてあつた汽車がバラバラになつてしまつたのだつた。確かにA夫の作ったタンカーが小さかつたのであるが、だからといつてA夫が悪い訳ではない。しかし、C夫の言葉にはA夫を非難しているような感じがあつた。A夫がC夫の側で険しい表情を見せている。私は二人がここでこの活動を投げ出してしまふような気がした。そこで二人に近付

き、C夫に「Aくんが今タンカーを大きく改良してくれると思うから大丈夫、汽車をもう一度繋げて待つていようよ」と声を掛けた。A夫も続いて「大丈夫だよ」と言つて、箱からブロックを取り出した。C夫は見通しが持てた様で、汽車をタンカーから取り出し繋げ直し始めた。C夫がこの事で全てを投げ出さずに続ける事が出来て良かったと思つた。

A夫がタンカーを作り直しC夫に渡した。C夫は「すごい！」と言いながら汽車をタンカーの中に入れて始めた。A夫はもう一つ大きなタンカーを作つていた。全長が七十七センチメートル程あるものでそれを自分で動かし、ままごとコーナーの畳の側まで進めていった。「先生、ここが港なの」と言いながら、ままごと用に置いてある木製の囲いを畳の縁に立てた。全長があるタンカーが畳の縁にびつたりとくつついている様子と白い囲いの感じが、不思議とリアルに感じられてくる。レールの広がりや海の広がり、そこにイメージされているのは、見ている私にも

充分感じられた。C夫やD夫もそこに海を感じているようで、

C夫は汽車に乗せたタンカーを

自分で動かし始めた。D夫はハ

ワイ行きの列車を自分も小型のタンカーにのせたくなつたようで、A夫に「ねえ、ねえ、C夫が使つていふようなタンカーを作つてよ」と頼んだ。A夫は快く「いいよ、待つて」と言つて作り始めた。D夫も自分で作れない訳ではないと思うが、この遊びの中では、A夫に作ってもらいたいと思つたのだから。この場面でもA夫の嬉しそうな表情が印象に残つた。

お片付け

最終的にE夫が加わり、四人がそれぞれイメージを持つて遊んでいた。A夫は終始レールと海の広がりやを意識しながら動いていた。C夫も港と列車に自分なりのイメージを重ねて遊んでいた。



D夫は作ってもらったタンカーを「ハワイ行き」として、ままごとコーナーに設けられた港を「ハワイの港」に見立て始めた。E夫も出上りがつた場の中にすんなり入り込み、汽車を動かし始めた。

気がつくと、片付けの時間になっていた。園庭から同じクラスのお当番さんが声を掛けに来てくれた。といつても、すんなり終わらせようと言う感じではなかった。「線路を元の通りに戻す事が出来るのは、あなたたちだけなのよ」と言うと、A夫がまず、二つのカゴを運び中央に置いた。「ここからが、M組のだよ」と言つてレールを外し始めた。D夫がそれを見て、同じ様にもう一つのカゴに入れ始めた。私が種類別に重ねてしまう事を提案すると、彼らはきれいに重ねようと、頑張つてくれた。C夫とE夫は、汽車をカゴに戻し始めた。かなりの量のレールと汽車を彼らは丁寧ていねいに片付けた。A夫はタンカーに使つた鑄型ブロックを自ら「バラバラにした方がいいんだよねえ、先生」と言いながら分解し始

めた。A夫が最後に汽車のセットをお隣のM組に返しに行った。使つたものを全てを片付けた。

遊びの中でお互いを認め合い、トラブルを越えていく中で遊びが展開していたと思う。特にA夫は、満たされた気持ちで活動を終えたと思う。「じゃあ、またね」と言つてろう下を戻すその足取りは、軽やかであつた。

一つの遊びの場面を通し、子どもたちがどんな思いを抱えているか、最初から終わりまでにそれらがどう変化していったか等を認識する事が出来た。保育者の言葉掛けのタイミングや量についても考えさせられた。そして、ひとりひとりがその遊びの中で、生かされている事を感じられる、そんな活動の積み重ねの大切さを再認識した。

きれいに並べられたレールに目をやりながら、ふとA夫の軽やかな足取りと後ろ姿が思い返された。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

今年は扉絵にこれまでの本誌の表紙を掲載しています。一、三月号は『婦人と子ども』の時期のもの、四、五月号には『幼児教育』のころのものを載せました。今月号からは、いよいよ『幼児の教育』と改題されてからの表紙です。

表面的には「の」が一字入っただけのこの改題には、実は大きな意図があったことを、河合隆一氏が本年四月号に紹介しています。その意図とは、頁数を倍加し内容を充実させて協会内部の機関誌のみならず社会的にも発展させたい、というもので披露の集いまで催されています。

私は大変興味深く思い、早速、改

題された第二十三巻第七号を開いてみました。東京会館で行われた披露の会の記念写真が口絵に掲載され、招待された教育界の諸名士や新聞記者が写っています。また、巻頭には茨木清次郎会長が「本誌の拡張に際して」を書いていて、それを讀むと、当時の幼児教育に関心のあった人達にも、『幼児の教育』が一機関雑誌から社会的活動へと進むことが望まれていたことがわかります。

ところで、この第二十三巻は、大正十二年七月に改題、八、九月号を出した後、九月一日に関東大震災に遭い、十、十一月号は休刊、十二月号を辛うじて発行するという状態で、さらに、次の年の第二十四巻一、三月号は、また休刊になってしまいました。拡張の機運には恵まれませんでした。

(A)

幼児の教育

第一〇〇巻 第六号

(二〇〇一年六月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年六月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

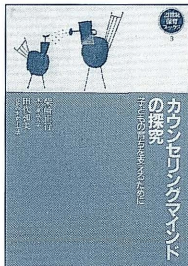


21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

3月・3冊 同時刊行！

編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）



21世紀保育ブックス③

カウンセリングマインドの探究 子どもの育ちを支えるために

柴崎正行 東京家政大学 田代和美 お茶の水女子大学

保育者が子どもと信頼関係を築いていくこと、子どものさまざまな表現から心の動きを理解していくこと、これらは、保育の営みの中で極めて大切なことです。近年、保育現場で重視されるようになったカウンセリングマインド。具体的にどのような考え方や、内容なのでしょう。また、カウンセリングとの関係は？ カウンセリングマインドの具体像を探ります。

B6判 208頁 定価：本体1,200円＋税



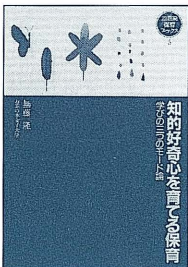
21世紀保育ブックス④

子ども虐待の理解と対応 子どもを虐待から守るために

庄司順一 青山学院大学

子ども虐待が頻繁に取り沙汰される社会背景を受けて、子ども虐待への関心が高まっています。「保育所保育指針」にも「虐待などへの対応」が記載され、「児童虐待の防止等に関する法律」も施行されました。しかし、虐待が発生する家庭はさまざまな問題を抱えており、一個人、一機関では対応できません。多くの人に関心を高め、理解を深めて協力、連携をしていくことが、今、子どもを虐待から守るために求められているのではないのでしょうか。

B6判 192頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑤

知的好奇心を育てる保育 学びの三つのモード論

無藤 隆 お茶の水女子大学

子どもが学び、成長していくのは、まわりのものや人に出会い、関わるという営みを通してなされます。その関わりの中で、思考も感情も働き、子どもの人格全体が活動していきます。子どもの遊びの中に学びをとらえることにより、遊びや活動がいかに知的な発達へと広がるかが見えてきます。子どもの知的好奇心や探究心を育む、幼児期にふさわしい知的発達を促す保育のあり方について、学びの三つのモードという新しい視点から具体的に考えていきます。

B6判 192頁 定価：本体1,200円＋税

既刊 ① 新しい教育要領・保育指針のすべて 森上史朗
② 新時代の保育サービス 柏女霊峰・山本真実

>以下続刊<

キンダーブックの
フレール館

最新刊



「幼児の教育」
連載の単行本化

保育で大切なことは、
小さなことの中にある。

お茶の水女子大学名誉教授 津守 真
(本書「紹介のことば」より)

保育の中の 小さなこと大切なこと

- * 保育の中には、ちょっとしたことで、ともすれば見過ごしてしまいがちなことの中に、実は大切なことが含まれています。子どもとのおくありふれた日常の中のそんなことを取り上げて、なぜ大切かを考えます。
- * 子どもの心に寄り添う保育とはどんな保育かを、子どもとのかかわりから明らかにします。
- * これからの保育に何が大切かを、豊富な保育事例から具体的に述べます。

守永英子・保育を考える会 著
A5判 224頁 定価：本体1,800円+税

定価 五五〇円(本体五二四円)☆